

## やがて哀しき土産物売り in ブルキナ・ファソ

1月に JICA 事前調査の団員として、西アフリカのブルキナ・ファソを訪問した。ブルキナ・ファソは「高潔な(正直な)人々の国(The Land of Upright People)」という意味で、1960年の独立当時からオートボルタ(ボルタ川上流)と呼ばれていたが、1984年に改称された。今回は短い訪問だったが、名前の通りにまじめで慎み深い人たち、という好印象を受けた。特に、中東の「インシャアッラー」のいゝ加減さに慣れ親しんだ者にとっては、彼らの約束や時間を守る姿勢は衝撃ですらあった。

今回の調査は、ブルキナ・ファソ南西部にあるコモエ州の森林保全計画策定に関するもので、砂漠化問題に直面している同国北部のサヘル地域とは異なり、調査対象地域は比較的降雨にも恵まれて森林資源が残された地域である。しかし、近年では違法伐採や移動耕作、過放牧、野火の発生等によって、森林資源の劣化や減少が問題となってきている。そこで、残された森林資源を保全し、持続的に利用していくための森林管理計画の策定が求められている。この森林資源の保全と利用を考える上で重要視されていることは、「持続性」と「住民参加」である。森林と地域住民との関わりは深く、薪炭材や用材としての利用はもちろん、カリテ(食用油、石鹸、化粧品の原料)やネレ(スンプラ味噌の原料)を始めとして食料、飼料、薬用植物等多くの非木材林産物の宝庫として、森林は住民にとってなくてはならないものとなっている。

ところで今回の調査に限らず、最近ではプロジェクトのオーナーシップや持続性、あるいは参加型開発の重要性が強調されている。どれも大切なことであるが、今回の調査では特に相手側の主体性(オーナーシップ)とドナー側の関わり方について考えさせられた。「住民参加」というのは当然のことながら、ただ単純にプロジェクトに住民が参加すればいい、という形式的なものではなく、そのプロジェクトに対して住民が積極的、主体的にかかわっていくという姿勢が重要である。しかし、ここブルキナ・ファソでも、プロジェクト実施中はうまくいっていたが、ドナーが手を引いた後はプロジェクトの管理・運営上で様々な問題が出てくる、という話はよく聞いた。「住民参加」という形はとっているが、住民側は自分たちの主体的な意志ではなく言われるままにやっている。だとしたら、オーナーシップ(主体性)を相手に要求しながら、実はそれを奪っているのはドナー側(の都合)ではないか。

ブルキナ人の「性格の良さ」にも起因する部分はあるのだろうが、こちらからの提案に対しても、「おっしゃる通りにいたします」、どんな援助でもやってもらえれば結構、という受け身の姿勢が見え隠れする。そして、その背後にあるものは「ゆとり」のなさではないか。土産物屋で買い物をした時に考えたことがある。外国人相手の土産物売りで、値段は交渉で決まる。そんなに高ければいい、と言うと最初に20,000CFAFと言っていたのが、すぐに10,000あるいは5,000CFAFと、値段は急降下する(1CFAF=0.2円弱)。もともと外国人相手ということで、何倍もの値段でふっかけているということもあるだろうし、彼らも損してまでは売ってはいないだろう。しかし、簡単に値段が下がるのは「貧しさ」や「余裕のなさ」が影を落としているのではないか。つまり、明日の10,000CFAFより今日の5,000CFAFが欲しい。そしてこれは土産物売りだけではなく、村人たちの生活や森林資源の減少にも当てはまることである。余裕がない。そこにすべてが集約されている。同じように値段交渉して買い物をする中東ではあまり感じないような値切った後の後味の悪さ、そしてどこか哀しいものを感じさせるブルキナ・ファソの土産物売り。そしてその背後にある貧しさと余裕のなさ…。そんな中でも、村を訪ねた時の子供たちの明るい笑顔には元気づけられた。「高潔な人たちの将来に幸あれ」と心から願う

(ブルキナ・ファソにて、湖東)



貴重な収入源となるカリテの木



首都ワガドゥッグの土産物屋



未来は子供たちのために・・・